

## 【ご参拝の皆様へ】

### 往生礼讃偈についてミニ解説

#### ●経典の概要

中国の高僧・善導大師（六一三〜六八八）作の、「礼拝」と「懺悔」から構成される浄土儀礼音曲。

正式には、「一切衆生を勧めて西方極楽世界の阿彌陀仏国に生ぜん」と願ぜしむる六時礼讃の偈」といい、略して『往生礼讃偈』とも『六時礼讃』ともいう。無量寿経や龍樹・天親菩薩らの聖教から御文を抄出し、行者が日常実修すべき六時（日没・初夜・中夜・後夜・晨朝・日中）の礼法を示す。

浄土系各派で用いられ、浄土真宗では蓮如上人が『正信念仏偈和讃』を朝夕の勤行として定める以前に、日常行儀と共に勤式に使用されてきた。

天台声明を基にした美しい旋律と、導師と衆僧交互の読誦が特徴。後半には高音の節が荘厳さを増し、導師の独唱となる「無常偈」が味わい深い。

#### ●各（六時）礼讃の主たる部分

・西方極楽世界の阿彌陀仏に南無し奉る

わたしを哀れみ護つて菩提心を育て この世も

後の世も 願わくは仏つねに摂めとりたまえ

願わくは人々と共にことごとく帰依しよう

それ故わたしは頂礼して

かの国の往生を願ひ奉る

・あまねく師僧・父母および善知識

その他あらゆる衆生が惑業苦の三障を除いて

共に阿彌陀仏国に往生するために帰依し

懺悔し奉る

・心から懺悔し奉る

十方の仏がたに帰依し懺悔し奉る

願わくはもろもろの罪を滅ぼしたまわんことを

いま 以前より修めた善根をもつてふりむけて

自分や他人の安楽浄土に生れる因とする

・つねに願わくは一切の人の命終の時に

すぐれた因縁と境界が悉く眼前に現れんことを

願わくは阿弥陀仏の大悲主 観音・勢至の

二菩薩や十方の諸仏を見たてまつらんことを

仰ぎ願わくは不可思議の光明に照らされ

み手を授けられて阿弥陀仏の本願によつて

かの浄土に往生せんことを

懺悔し回向し発願し終わつて

心から阿弥陀仏に帰依し奉る

・礼拝し懺悔しおわつて

すべての三宝を恭敬し奉る

菩提を得られた仏に帰依して

仏道を求める心が恒に退転しないようにしよう

一切智の方に帰依して

涅槃さとりに入る智慧の門を得しよう

諍いのない僧に帰依して

同じく和合のなかまに入ろう

願わくはもろもろの人々が

身口意の三業を清浄にして仏教をたもち

一切の賢聖がたを敬礼せんことを

願わくはもろもろの人々と共に

阿弥陀仏の浄土に往生することを願ひ奉る

### (日没無常偈)

諸々の人々よ聴け いま日没の無常偈を説こう

人間はいそがしくいろいろな務めにかかわつて

いのちの日夜に去ることを知らぬ

あたかも風中の灯がいつ消えるとも期しがたい

がようである

忙しく六道を経めぐつてきだまれる所がない

いまだに解脱して苦海を出ることができない

どうして安閑としていて驚かずにおられようか

おのおの聞かれよ

強健すこやかにして力ある時に

自らつとめ自ら励んでさとりを求めよ

(初夜無常偈)

煩惱は深くして底がなく

迷いの海はほとりが無い

苦海をわたす船はいまだ立たないのに

どうして睡眠を楽しんでおられようか

勇猛につとめはげみ

心を損めて いつも念仏三昧におけ

(後夜無常偈)

光のように時はうつり流れて

たちまち五更(午前四時)のはじめに至る

無常は刻々に至り つねに死王と共にいる

もろもろの行ずる者に勧める

勤め修めてさとりに至れ

・願わくはわれら弟子たち 命が終ろうとする時

心顛倒せず 心錯乱せず 心失念せず

身心にいろいろの苦しみなく

そのたのしみは禪定に入るがよう

聖衆がたが前に現れ 如来の本願力によって

阿弥陀仏の浄土に上品の往生をとげよう

その浄土に往生し終つて六種の神通を得て

十方の迷いの世界に入り苦しみの衆生を救おう

虚空法界の迷いの衆生が尽きるならば

わたしの願いも尽きるであろう

発願し終わって心から阿弥陀仏に帰依し奉る

●阿弥陀仏の浄土に往生するためには？

天親菩薩(北インド・五世紀頃)は『浄土論』で、

菩薩の修行法として「五念門」の行を明らかにした。

① 礼拝門(身業) 仏を礼拝すること。

② 讚嘆門(口業) □に仏名を称えて仏の徳を褒

め称えること。

③ 作願門(意業) 諸々の思いを止めて、浄土に

精神を集中(止)すること。

④ 観察門(智業) ①②③によって正しい智慧を

起こし、その智慧によって浄土の眞実相を觀察すること。

⑤回向門（方便智業）①～④によって得るところの功德をすべてのものに施すこと。

前の四門は自己がさとりに入るためのもので「入門」、回向門は他を救うためにはたらき出るものであるから「出門」、合わせて出入二門という。

親鸞聖人は曇鸞大師（四七六～五四二・中国山西省）の『浄土論註』を通して、これら五種の行が、すべて法蔵菩薩所修の功德として名号にそなわり、衆生に回向されると説く。

### ●「懺悔（さんげ）」が何度も出てきますね

懺は罪のゆるしを他人に請うこと。悔はあやまちを悔い改めるために、ありのままを仏・菩薩・師長（師や先輩）・大衆に告白して謝ること。

私たちの言葉や行いや考えは「いろいろな他の縁に乱されて信心を失い、阿弥陀仏の本願に背き、

釈迦仏や諸仏の教えを理解せず、浄土に念をかけることは続かず、如来を想う心も途絶え、回向願生の心は偽物であり、貪欲・瞋恚や邪見などの煩惱が覆い尽くし、慚愧・懺悔の心が無い」。

浄土教では、阿弥陀仏の名号を称える念仏に懺悔の徳があるとされる。

### ●成仏へのバージョンアップ

生・老・病・死という人間の苦悩の連鎖から解放を求めた釈尊の悟りは、諸行無常・諸法無我・一切皆苦・涅槃寂靜、縁起という言葉で表現された。

インドから中国や日本へ伝わる二五〇〇年の間、部派・学派・宗派が生まれ、それぞれの教えが体系化され庶民に広まった。それは人生の不条理、死への恐怖などと格闘した人々の歴史でもある。

称名念仏は、極楽浄土という目覚めた世界へ、全て命が向かう働きとして開かれたのである。